



木材加工最前線

Contents

- ◇木材高度加工研究所から
 - ・木材基礎講座を開催しました 2
 - ・実践！オンサイト製炭 木高研 准教授 渡辺千明 2
 - ・豪雪地帯での「床板開閉式木橋」を提案 木高研 准教授 野田 龍 3
- ◇木材加工推進機構から
 - ・第6回ウッドファーストあきた木造・木質化建築賞の作品を募集しています 4
 - ・木材利用提案コンクールの作品を募集します～夢広がる木の空間の創造～ 4
 - ・令和7年度あきた木造建築塾を開催しています 4
 - ・MOCTION(モクション)秋田企画展 4
 - ・理事会、評議員会の概要と大坂新代表理事の抱負 5
 - ・板垣教授に石膏ボード工業会より特別功労賞 5
 - ・新任者の紹介(木高研／推進機構) お知らせ(今後の行事予定など) 6

令和7年度の木高研運営協議会 人材を確保してプロジェクト推進へ

7月17日(木)に秋田県立大学木材高度加工研究所(以下、木高研)の運営や研究、教育、地域貢献・社会貢献活動について有識者から助言を得て今後の取組に反映させることを目的として、令和7年度木材高度加工研究所運営協議会を開催しました。

協議会は林産関係企業、建築関係団体、木材加工・利用団体、国立研究機関、行政(秋田県・能代市)の各分野の有識者6名と、本学の両学部長および研究所教員の4名で構成され、当日は協議会委員全員から対面およびオンラインで出席いただきました。

はじめに木高研の高田克彦所長が研究所の組織や予算などの概要説明を行い、その後、質疑を交えながら「教育」、「研究」、「地域貢献・社会貢献活動」の各分野について説明しました。

質疑内容の一部は以下のとおりです。

【教育】
木高研には研究生がいないようだが、研究に興味があつて、お金を払って教員から指導を受けるような社会人はいないのかと問われたのに対し、システム科学技術学部では企業が授業料を納めて特定の講義を受けている方もいる。こうした情報が広く周知されていない可能性もあるので、今後、全学的な課題として取り組んでいきたいと回答しました。

【研究】
研究期間の長いプロジェクトが採択されて、得られる資金も億単位となっており、これに対してどう対処していくべきなのか考えを聞かせたいと聞かされた。質問がありました。
大型予算獲得の目的の一つは木高研の研究機器の更新を促進することであり、研究に関しては木高研の教員が本来業務としてしっかり対応することと同時に、外部との連携も重要と考えていると回答しました。
さらに、今年から東京大学と連携協定を結んで研究を進めることになっており、これに関連して民間企業から一定額が寄付される予定であることから、クロスアポイントメント制度の活用やURAの補充など、さまざまな形で人材を確保してプロジェクトを推進していきたいと回答しました。



木高研運営協議会が開催されました

令和7年度の木材基礎講座

「木材の加工と利用」に毎回30数名が参加

林業・木材産業に関心を持つ人々を対象に今年度も木材基礎講座を開催しました。

本講座は、木高研が日ごろ取り組んでいる幅広い研究や木材の利活用に関心を持っている市民・林業・木材関連業者を対象に、より掘り下げた知識や最新の研究情報を提供することを目的として、例年この時期に週一回のペースで連続4回開催されています。

今回のテーマは「木材の加工と利用」。木材は建築・土木用資材としてだけでなく、桶・樽、下駄など身の回り品から生活に欠かせない什器としても古くから私たちの身近な生活用に利用・加工されてきた材料です。木材・木製品がさまざまな分野で見直されてきている今日このごろ、改めて木材の利用と加工に焦点を当てた本講座には、ZOOMによるオンライン配信を取り入れて対面とのハイブリッド化したこともあり、毎回30数名の参加者がありました。

基礎講座の日程と演題は次のとおりです。

- ・6月2日：「木をばらす～ひく・けする・ととのえる～」
木高研 足立幸司 教授
- ・6月9日：「木を再構成する～集成材・CLT・LVLなど～」
木高研 岡崎泰男 准教授
- ・6月16日：「木を再構成する～合板・ボード類～」
木高研 山内秀文 教授
- ・6月23日：「木材を再構成する～とかす・くっつける～」
木高研 栗本康司 教授、安藤大将 助教

○

「木材の加工と利用」というテーマは木材の需要を拡大していく上では基本的なことですが、その加工についてはいろいろなタイプがあります。私たちが日ごろ身近に触れ合うものとしては合板や集成材のほかCLTやLVLなどがあります。今回はこういった再構成木材を中心に2回、また木材を溶かすことを含めた化学加工——木を再構成するとか接着剤の話とか、またちょっと違う木材の使い方などについても話していただきました。

○

このうち合板や集成材、CLT、LVLについて説明した岡崎准教授は木質材料について形状によるものと用途によってその分類が2タイプあると述べ、柱・梁のような細長い形状のもの（軸材）、床板や壁、屋根下地のように薄くて幅広な材料（面材）を挙げました。

また、わが国で開発された当時には注目された1枚で柱と壁、床と梁を兼ねられるようなCLTなど厚い面材（マスティンバー）があまり普及していない理由として、戸建て住宅以外の木造建築（中大規模木造）がさほど普及していないことに加えて、現状では大断面集成材構造が先行していることからそこへ食い込むことが難しいことを挙げ、「もともとCLTはRCの代替構造を指向した材料なので、RCの設計者にその存在を認めてもらうことが今後の課題だ」と結びました。



木高研 岡崎泰男 准教授

支障河川敷の木をオンサイトで木炭に

バイオ炭化*で防草資材に活用できるか検証へ

木高研 准教授 渡辺 千明

木材高度加工研究所では、2022年から国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所と米代川河川敷に繁茂するヤナギなどの支障木をオンサイトで木炭にし、土中埋設による雑草生育の抑制効果を検証実験しています。

2023年からは、国道7号沿いでボランティア活動している能代バイパス黒松友の会の剪定会で生じるクロマツの剪定枝葉の製炭と活用にも取り組んでいます。いずれの取り組みも、これまで費用をかけて廃棄していたものをバイオ炭化し、防草資材として有効に活用できるかを検証するものです。



このバイオ炭化では、熱分解により樹木が取り込んだ大気中の二酸化炭素（実際の樹木中ではセルロースなどの化学成分）を安定した炭素体に変換することができ、生産されたバイオ炭の土壌への埋設は、炭素の隔離技術（二酸化炭素換算）として有効とされています。そのため、地域で取り組める地球温暖化対策としても大いに期待されています。

6月27日、関係者以外の参加も呼びかけ、前年10月の剪定会で生じた剪定枝葉を研究所敷地内で製炭しました。消防署には予め期間に余裕をもって「火災とまぎらわしい煙または火炎を発生する恐れのある行為の届出書」を提出していますが、大船渡市をはじめ各地での林野火災が続いた後だったため、風速も十分考慮して実施を決めました。

ステンレス製の簡易製炭器2台を組み立て、中に種火を作って作業開始です。冬を越した剪定枝葉は良く乾燥しており、勢い良く炎が上がります。



製炭器内を高温に保つよう燃えすぎに注意しながら、全ての剪定枝葉を投入しました。炭化が終了したら、水をかけて消火します。水蒸気が一気にたちこめ、辺りは真っ白になりますが、ひるまずに水をかけ続け、製炭器内をかき混ぜていると黒い炭が見えてきます。完全消火を見届け、作業終了です。

この日、30リットルの土のう袋約200個分の剪定枝葉から12袋の木炭ができました。これまでの実績を元にした計算によれば、乾燥重量で42kgの二酸化炭素が固定されたこととなります。



この秋の剪定会で生じた剪定枝葉も来春まで乾燥させて製炭・活用し、地域内の資源循環と二酸化炭素固定の仕組みづくりを考えていくことにしています。

*剪定枝やもみ殻などの農業残渣を低炭素、もしくは無酸素環境下で熱分解して得られる多孔質の固形物

豪雪地帯での「床版開閉式木橋」を提案

木高研 准教授 野田 龍

2025年6月22日から27日にかけて、オーストラリアのブリスベンにてWorld Conference on Timber Engineering 2025 (WCTE2025)が開催されました。WCTEは、木材工学に関する世界最大級の国際会議で、2年に1度開催されます。研究者、技術者、建築家、企業関係者などが一堂に会し、木材工学、特に木造建築の最新技術や設計手法、環境への貢献について議論・発表する場です。主催者の発表によると、今回は44の国から約950名が参加、日本からは開催国オーストラリアの250名に次ぐ127名が参加したとのこと。私はこの国際会議で「Development of an openable deck timber bridge to reduce snow loading」と題して口頭発表を行いましたので、その内容についてご紹介します。

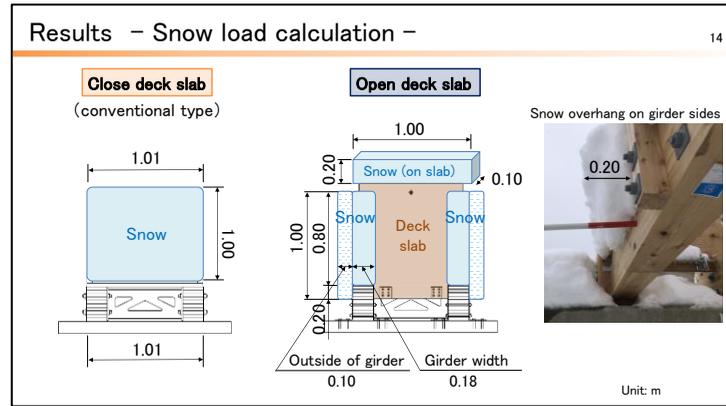
○

秋田県は東北地方に位置し、特に冬季には4m以上の積雪が観測される豪雪地帯である。このような環境下において遊歩道等に架かる歩道橋では、雪の荷重が大きく影響し、橋が傾いたり落橋したりする事例が発生している。特に人の立ち入りが禁止される冬期には、橋の床版上だけでなく、橋側面にもせり出すように雪が堆積することで雪荷重がさらに増加する。

試験体端部に回転させずに残した床版上には約100cmの積雪が確認された。桁上の積雪は60～80cm程度、回転させた床版上には最大で20cm程度の積雪であったので、従来の構造に比べると橋への積雪を大きく減らせることが分かった。また、着雪が少ないせいか、あるいは風通しの良い構造となっているせいか、橋に積もった雪が早く消失することも確認され、橋が受ける雪荷重の継続期間を短縮する効果も示唆された。

積雪荷重の試算では、床版を回転させた状態での雪荷重は橋長1mあたり約1.8 kNであり、閉じた状態の約3.5 kN/mと比較してほぼ半減できることが分かった。さらに、設計において考慮される春～秋期の群衆荷重と比較しても、雪荷重の方が小さくなり、主桁断面の決定要因が冬期の雪荷重ではなく、群衆荷重に移行可能であることが明らかになった。これにより、従来のように雪荷重に合わせて構造を過剰に強化する必要がなくなる。

結論として、床版開閉式木橋は積雪期における構造負担を大幅に軽減できる新しい設計アプローチであり、利用者がいない冬期の安全性と合理性を両立できることが示された。しかし、今回の試験は積雪深が1m程度までの範囲であり、より厳しい積雪条件に対する性能については今後の検証が必要である。



通常、橋の構造設計では春～秋期にかけての群衆荷重(3.5kN/m)を想定するが、積雪期にはそれ以上の雪荷重に対応する必要がある。例えば、積雪深が3mの場合、雪荷重は10.5kN/mとなり、群衆荷重の3倍にも達する。冬期は利用者が存在しないにも関わらず、高い構造強度が求められるため、コストパフォーマンスの低下という課題がある。

この問題に対して、本研究では「床版開閉式木橋」という構造を考案した。この橋は、春～秋期は桁橋として利用できるが、冬期には床版(Openable-Deck)を90度回転させることで床面に雪が積もらない構造となっている。橋は県産スギ集成材を用いた2主桁で構成されており、幅180mm、高さ300mmの断面を持つ。床版には構造用合板を使用し、人力で回転可能である。回転後はワイヤーロープとアイボルトで主桁に固定し、風雪による倒伏を防止できる構造となっている。

本構造による雪荷重の軽減性能を検証するため、秋田県内2箇所にて屋外暴露試験を実施した。Site 1では2022年12月～2023年3月、Site 2では2023年12月～2024年3月にかけて観測を行った。両地点には橋長6mの高欄なしの試験体と橋長3mの高欄ありの試験体を設置し、地上2m以上の高さに設置して地面からの積雪影響を排除した。試験体周辺には複数の定点カメラを配置し、日中は1時間ごとに撮影を行ったほか、積雪が多い日には現地調査を行い、試験体への着雪状況の確認を行った。

試験結果によると、最大降雪量は52cm/day、最大積雪深は96cmであった。回転させた床版部分では積雪がほとんどなく、

○



WCTEが開催されたブリスベン川沿いのリバーサイド地区(写真①)は、高層ビル群と川沿いの遊歩道、レストラン街が融合した大都会を思わせる地区なのですが、近くには植物園や緑地公園(写真②)もあり、都会でありながら自然も感じられる、気持ちの良い街でした。次回は2027年8月にカナダ内陸部のエドモントンで開催される予定です。



第6回ウッドファーストあきた 木造・木質化建築賞の作品を募集しています

県産材の需要拡大を推進するため、木造・木質化のモデルとなる優れた建築物を募集しています。

対象は、秋田県内に現存し、良好に維持管理されている建築物等で、木造もしくは天井、床、壁等の内装や外壁の外装などに木材を使用している建築物です。木塀等の構築物の形で屋外空間に木材を使用しているものも対象となります。なお、戸建て住宅及び国や県が整備したものは除かれます。

これらのうち、2020(令和2)年4月1日から本年6月22日までに竣工したものが該当になります。また、過去に何らかの賞を受賞した施設の応募も可能ですが、当建築賞を過去に受賞したものは対象外となります(受賞していないものの応募は可)。

募集部門は次の4部門です。

- (1) 木造A部門: 延床面積500㎡超、又は軒高9m超
- (2) 木造B部門: 延床面積500㎡以下、又は軒高9m以下
- (3) 木質化部門
- (4) リノベーション部門
- (5) 屋外空間部門

募集期間は、令和7年6月23日(月)～8月29日(金)となっております(最終日午後5時必着)。

応募施設については、審査委員による現地確認、審査委員会により選出・表彰するとともに、県民や建築関係者に向けて広く紹介します。

応募の詳細は、当推進機構ホームページをご覧ください。

また、県公式サイト(農林水産部林業木材産業課)でも同様の情報に加え、過去の受賞施設などがご覧いただけます。



木材利用提案コンクールの作品を募集します ～夢広がる木の空間の創造～

全国に誇る本県の森林資源は、年々成熟しており、いよいよ本格的な利用期を迎えています。このような中、建築基準法の改正、脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律の施行などを背景に、商業施設など住宅以外の建築物における木材利用への関心が高まっています。

本コンクールでは、秋田県内の専門学校・短期大学・大学に在籍し、次世代の建築を担う学生から、木材を利用した非住宅建築物や、これからの社会で必要と考えられる空間づくりにつながるアイデアを募集します。

募集期間は、令和7年8月18日(月)～10月31日(金)となっております(最終日午後5時必着)。

作品に関する条件については、次のとおりです。

- (1) 非住宅や空間に木材を使用した提案。
ただし、木造に限らず、屋内外の木質化や空間を構成する家具等の提案も認めます。
- (2) 提案する施設等の設定(用途、利用方法等)は、すべて応募者の自由とします。

応募のあった作品については、審査委員会により優れた作品を選出・表彰するとともに、副賞を贈呈します。

応募の詳細は、当推進機構ホームページをご覧ください。

また、県公式サイト(農林水産部林業木材産業課)では、過去の受賞作品などがご覧いただけます。



令和7年度 あきた木造建築塾を開催しています

令和7年度あきた木造建築塾を全4回の日程で、オンライン形式(Zoom)により開催しております。

本セミナーは、非住宅建築物の木造・木質化を推進するため、森林資源、林業・木材産業及び木造建築に関して必要な事項を学び、地域の森林資源の有効活用につながるよう基本的な知識を共有し、実践に活かしてもらうことを目的として、木造建築に携わる方を主な対象として、毎年開催しています。

第1回 令和7年7月9日(水)

『木材利用と炭素循環』 県立大木高研 所長 高田克彦 氏

第2回 令和7年7月23日(水)

『材料としての木材』 県立大木高研 准教授 川井安生 氏

『木質材料』 県立大木高研 教授 山内秀文 氏

第3回 令和7年8月8日(木)

『木造建築の変化』 県立大システム 教授 板垣直行 氏

『中大規模建築物での木材利用～流通材を活用した木製トラス』 (株)角繁 TS事業部 課長 草薨和仁 氏

第4回 令和7年8月20日(水)

『木造建築物の耐久性・耐候性』

ウッドストック技術士事務所 主宰 原田浩司 氏

『サステナブルな木造設計』

(有)もろくす建築社 代表取締役 佐藤欣裕 氏

今後、対面形式(施設来場型)で「あきた木造建築塾特別講演会」の開催を企画しております。詳細については、当推進機構ホームページ等で配信する予定です。

ご興味のある方は、是非ご参加ください。

MOCTION(モクシオン)秋田企画展

東京都が設置した『国産材の魅力発信拠点MOCTION』は、木材の大消費地である東京での国産木材の更なる利用拡大を図る魅力発信拠点であり、共存共栄の視点から各道府県の自治体と連携した「企画展示エリア」と、都市部におけるオフィスの木質化などの木材利用を促進する「モデルオフィス」の2つで構成されています。

フロアは、家具や生活用品、住宅設備、建材まで、個性豊かなショールームとショップ、住宅デザインの書籍や製品カタログを集めたライブラリーなどの情報フロアとなっています。

秋田県では、県内の森林資源の成熟に伴って増加する大径材から生産される木材製品の利用拡大を図るため、今回で3回目となる首都圏での企画展を次のとおり開催します。

・開催日 令和7年10月23日(木)～11月4日(火)

・開催場所 MOCTION ショールーム
東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー
リビングデザインセンターOZONE 5階

・主催 秋田県農林水産部林業木材産業課
(秋田県木材加工推進機構への業務委託)

リビングデザインセンターOZONEには、平日は建築・インテリア関係のプロの方や学校での見学、土日は新築・リフォーム・家具購入等を検討している一般の方が多く来館されます。



令和6年度の実施状況

推進機構の評議員会・理事会

財務基盤の強化を目指す

代表理事に大坂真一氏を選定

◇6月18日に開催された木材加工推進機構の定時評議員会では、令和6年度の事業報告及び決算案のほか、任期満了に伴う理事・監事の選任案が承認されました。

令和6年度の決算では経常収益38,565千円に対して経常費用が39,910万円となり、経常収支増減額は△1,345千円。県からの受託金と依頼試験事業収入の減少により、経常収入が前年度比△2,729千円となり、6年ぶりのマイナス決算となりました。今年度も引き続き各部門の収支均衡を図りながら財務基盤の強化を推進すると報告し承認されました。

任期満了に伴って選任された理事・監事は次のとおりです。

※は新任、○は再任(敬称略)。

【理事】柴田智生(能代市農林水産部長)※大坂真一(早口木材(株)代表取締役会長)○清水譲(秋田県森林組合連合会代表理事専務)鈴木光宏(秋田県木材産業協同組合連合会専務理事)村田良太(一般社団法人秋田県建築士事務所協会会長)横山和弘(東北電力(株)秋田支店販売本部法人営業統括部長)澁谷栄(秋田県立大学木材高度加工研究所准教授)塩谷学(秋田県木材加工推進機構事務局長)

【監事】淡路誠(能代市代表監査委員)佐々木久則(秋田銀行能代支店長)



◇6月5日の評議員選定委員会では、任期満了に伴い評議員4名が選任されました。

【評議員】齊藤滋宣(能代市長)※丹哲男(秋田県木材産業協同組合連合会理事)小松佳和(秋田県森林組合連合会代表理事会長)高田克彦(秋田県立大学木材高度加工研究所所長)

◇6月30日の臨時理事会では、大坂真一氏が代表理事に、塩

谷学氏が業務執行理事に選定されました。なお、評議員と監事の任期は令和11年6月の定時評議員会まで。理事の任期は令和9年6月の定時評議員会までです。



新たに代表理事に選定された大坂真一氏は昭和51年に法政大学経営学部を卒業したあと、昭和53年に男鹿市船川でロシア材のエゾ・トドマツ原木を製材する早口木材(株)に入社。

昭和60年に専務取締役、平成9年に代表取締役社長、令和5年からは代表取締役会長に就任しています。

この間にロシアが針葉樹原木の輸出税率を大幅に引き上げ、事実上の丸太禁輸措置を講じたことを契機に製材用原木を国産のスギに転換、現在では秋田スギ羽柄材など一般材製品の製材工場として年間15,000m³以上の原木を消費しています。

平成20年から協同組合秋田木材コンビナート理事長、同23年から秋田県木材産

業協同組合連合会(秋田県木連)理事長および同26年には任意団体から法人に発展した秋田スギ製材協同組合の理事長を務めています。

新しい推進機構代表理事に選定された大坂氏は「木材関連業界を取り巻く情勢・環境はウッドショックのあった数年前に比べてドラスチックに変化している。この変化の波を乗り越えるため、これからの推進機構は木高研の群知と連携してAI技術の導入などを図りながら、厳しさが増す林業・木材関連業界の発展に向けて寄り添っていかねばならない」と抱負を語ります。



県立大学の板垣教授に

石膏ボード工業会より特別功労賞

秋田県立大学システム科学学部建築環境システム学科の板垣直行教授が5月13日に東京都内で開催された(一社)石膏ボード工業会(須藤永作会長)の第49回定時総会で石膏ボード賞・特別功労賞を授与されました。特別功労賞は、石膏ボードをはじめ建築業界の育成と発展に寄与した方の功績をたたえて表彰するものです。

板垣教授は、木質耐火構造研究の草創期以来、約20年にわたって木質耐火構造の基礎研究や部材開発に取り組み、開発した部材を実際の建物に実装するなどのほか、木造・防火に関する研究者のみならず、東北地方の製材産業、難燃剤メーカーなどと協働して耐火木質ラーメン構造研究会を組織し、木質耐火・木造部材の国交省大臣認定を取得するなどの実績を積み上げてきました。



2時間耐火構造柱 性能評価試験

ここに至るまで木造耐火構造物の研究では、その研究開発と実用化に林業・木材産業を基盤とした地域発の息の長い取り組みを続け、林産地域を中心とした技術開発に多大な成果を挙げてきました。今回の特別功労賞

では、「林産地域発の木質耐火構造の研究開発・市場化への取り組み」に関するテーマが対象となりました。

板垣教授は今回の受賞に際して「木高研の先生方や学科の学生をはじめ研究会に参加されている方々と20年近く近く取り組んできた木質耐火部材開発について評価いただき、素晴らしい賞をいただくことができました。

これまで関係していただいた皆様に感謝申し上げるとともに、安全・安心な木造建築の実現に向けてさらに研究を進めていきたい」とのコメントを寄せています。

(秋田県立大学のウェブサイトより)



新任者紹介

木高研 特任助教 **荒川 泉**

4月1日に特任助教として着任しました。
東京農工大学で15年間を過ごし、能代へと参りました。
木材を生み出す樹木の幹にある、生きている細胞の構造や機能に関心をもち、主に顕微鏡を使って研究に取り組んでいます。

7月までは自転車生活でしたが、ついに中古車を購入しました。秋田では初めての車生活、そして雪国生活となります。
日々を楽しみながら研究に励んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



木高研 特任助教 **Md Hasnat Rahman**

4月1日より木高研に着任しました。Md Hasnat Rahmanです。
東京農工大学で博士号を取得しました。私の研究は木材形成メカニズムに関するもので、主に植物の幹細胞として知られる形成層の活動を調査し、分子生理学的アプローチを通して木材の品質向上を目指しています。

気候変動が材形成に与える影響と木材資源の有効活用、持続可能な社会の発展への貢献に関心があります。
木高研や関連機関との連携を通じて、この分野を発展させ、学術界と社会の両方に利益をもたらしたいと考えています。



木材高度加工研究所
総務・管理チームリーダー
船山 晴美

4月1日付けで木高研に採用・配属されました。

4ヶ月が過ぎようやく業務にも慣れ、業務も円滑に進めることが出来るようになってきたところです。担当する木材基礎講座や施設見学では研究成果や木材加工の知識の普及など住民との繋がりを大切にする教員のお手伝いをしております。

これからも地域との関わりを大切にして木材加工への理解促進に努めてまいりますので、よろしくお願いいたします。



木材加工推進機構
業務執行理事兼事務局長
塩谷 学

このたび、4月1日付けで着任しました。県庁職員としては初の県北勤務になります。

子供2人は独立して県外在住。
自宅で妻、毎日私の帰りを喜んでくれる老犬1匹(室内犬)と暮らしています。
木高研やその他関係機関のご協力をいただきながら、県内木材産業の振興に寄与したいと考えておりますので、どうかよろしくお願いいたします。



お知らせ(開催予定の行事・会議情報など)

8月 7日(木) あきた木造建築塾③(オンライン)
13日(水)~15日(金) 夏期休業
20日(水) あきた木造建築塾④(オンライン)
21日(木)~22日(金) 全国木橋サミット2025(函館)

10月23日(木)~11月4日(火)
MOCTION(モクシオン)秋田企画展(東京)
12月下旬(予定)
あきた木造建築塾特別講演会(秋田)

木材加工推進機構の事業をご利用ください

1 顧問による情報提供活動、経営へのアドバイス

賛助会員企業などからの要請を受け、推進機構の顧問が直接訪問して情報提供や経営へのアドバイスなどを行います。また、業界団体等が主催する講演会や研修会の講師も受け付けております。

2 技術コンサルタントによる指導

木材に関する知識及び経験を有する専門家を「技術コンサルタント」に委嘱しており、木材関連企業の技術向上のお手伝いをいたします。製品開発や製造工程に関する技術的なことなどお気軽にご相談ください。

3 依頼試験の実施

企業などからの依頼を受けて「強度」「含水率」「接着性能」「ホルムアルデヒド放散量」など各種試験を木材高度加工研究所の協力を得て行っています。詳細は当機構のWEBサイトをご覧ください。